## 属人区長の書簡 (2008年9月)

2008/09/09

愛する皆さん、イエスが私の娘たち と息子たちをお守りくださいますよ うに!

手紙のテーマに入る前に、まず神に 感謝をささげたいと思います。教皇 様が、Kenthurstにお泊りになり、 私たち皆が実際にomnes cum Petro 「皆、ペトロと共に」過ごすことと できたからです。こうして、公 の後継者であられる教皇様の仕事と 休息に貢献できました。引き続きに 教皇様と、共に働く方々のためにる とにしましょう。

ベネディクト十六世は、度々、使徒パウロについてお話しになりました。私たちはその教皇様と全面的に一致していたいと願っています。ダマスコへの途上での回心の後、サウロは、自分の召し出しと使命が主の十字架の神秘に深く関わっているものであることを、明確に自覚してい

たことを考えましょう。パウロに洗礼を授けることに抵抗したアナニアに向かって、イエス様ご自身が入います。「あの者は、異邦人にわます。「あの者は、子らにからないないなるを、わたしなどの名をに苦しまなくてはならないを、わたしは彼に示そう。」(使徒言行録9.15-16)

聖パウロの生涯は、主のこのみ言葉 を絶えず実現するものでした。条件 なしに恩恵に応えつつ、イエス・キ リストを知ることと、私たちの救い のために人となり、死んで復活した 神の御子の姿を、新しいキリスト者 に示して、主を知らせることに没頭 しました。ガラテヤの教会への手紙 の中で、回心の瞬間から夢中になっ た「キリストの内に生きること」に ついて触れて、こう断言します。 Christo confixus sum cruci(ガラテ ヤ2.19) 私はイエスと共に十字架に

つけられています。そして、この緊密な一致の結果、日々の全面的な献身において、「生きているのは、もはやわたしではありません。キリストがわたしの内に生きておられるのです。」(同上20)と言えるほど、主との神秘的な一致に達したのです。

この十字架トのキリストとの一致 は、使徒にとって単なる「理想」で も、理論上のことでもありませんで した。手紙の中で自分について語る ある箇所で、自分にとって、キリス トと共に死ぬ必要とは具体的にどの ようなことであったかを列挙してい ます。。「ユダヤ人から四十に一つ 足りない鞭を受けたことが五度。鞭 で打たれたことが三度、石を投げつ けられたことが一度、難船したこと が三度。一昼夜海上に漂ったことも ありました。しばしば旅をし、川の 難、盗賊の難、同胞からの難、異邦 人からの難、町での難、荒れ野での

これはコリントの教会への書簡の数節ですが、読むたびに感動し感謝せついません。というのも、主のないに、主のないに、主のないに、高がに、高がに、まないのでは、まびに満ちて、して思いとを、はいるからです。「キリストしるからです。ように高いの内に宿るように、おたしは弱さ、わたしは弱さ、わたしは弱さ、わたしは弱さ、わたしは弱さ、もればない。

辱、窮乏、迫害、そして行き詰まりの状態にあっても、キリストのために満足しています。なぜなら、わたしは弱いときにこそ強いからです。」(同上12,9-10)

この使徒の同様の言葉を解説して、 ベネディクト十六世は言っておられ ます。「パウロは、もはや自分のた めに、すなわち自分自身の義のため に生きることを止めました。彼はキ リストによって、キリストと共に生 きたのです。自分をささげることに よって、自分自身を築こうとするの を止めました。これが新たな義で す。主が私たちに与えて下さった新 たな方向づけです。それは信仰に よって私たちに与えられました。キ リストの自己奉献の最高の表現であ る、キリストの十字架を前にして、 誰も自分自身を誇ることはできませ ん。 | (ベネディクト十六世、2006 年11月8日一般謁見の講話;『使徒 一教会の起源』191ページ)

今にも通じることですが、聖パウロ の時代には、多くの人が救いを求め て、秘教の知識やセンセーショナル な教えを探していました。使徒は彼 らに、それは神が意図された道では ないと忠告し、verbum crucis(1コ リント1.18) 十字架の言葉を宣教し ます。そして、疑問の余地のないよ うに全ての人に教えています。「ユ ダヤ人はしるしを求め、ギリシア人 は知恵を探しますが、わたしたち は、十字架につけられたキリストを 宣べ伝えています。すなわち、ユダ ヤ人にはつまずかせるもの、異邦人 には愚かなものですが、ユダヤ人で あろうがギリシア人であろうが、召 された者には、神の力、神の知恵で あるキリストを宣べ伝えているので す。神の愚かさは人よりも賢く、神 の弱さは人よりも強いからです。| (同上22-25)

内容があり、常に励ましを与える言葉ですが、9月14日の聖十字架称賛

の祝日を準備しているこの時期、黙 想するのに最適な言葉です。この祝 日は、古くから教会に、そして特に 教会の一部をなすオプス・デイに、 しっかりと根づいています。十字架 の神秘を熱心に説いた聖パウロにさ さげられたこの年には、これまで以 上に良い準備をしてこの祝日を迎 え、喜び祝うように促されます。 日々どのように自己放棄の機会を探 しているでしょうか。深い意味を持 つ木の十字架をどんな信心を込めて 見ていますか。犠牲を愛しています か。

聖ホセマリアの生涯においては、 1928年10月2日から、十字架上のキ リストと一致する望みがはっきりと 表れていました。しかし、それより 以前、非常に若かったとき、幼年時 代から青年時代にかけて、主は大小 様々な障害を通して彼に準備をさせ ておられたのです。そして、オプス・ デイが創立されると、オプス・ デイが聖十字架に深く根をおろして いなければならないことを、はっき りとお表しになり、様々な折りに非 常に異なる方法でそのことをお教え になりました。創立者は時々、なぜ こんな苦しみを、と理解できないこ ともありましたが、いつも前進し続 けました。それが神の《愛撫》であ ると確信していたからです。1948 年、ある説教でそのような年月の思 い出を、三人称の形で話したことが あります。自身について語るこれら の言葉は、度々遭遇された主の十字 架に対する反応を理解するのに役立 ちます。

主は、数々の災難が降りかかるのをお許しになり、それを通して創立者の心を鍛えられたのです。「マドリードの下町を、悲しみを抱えて一人で行ったり来たりしていた人を覚えています。神のみ旨を果たす望みに燃え立っていました。しかし、頂いた使命を果たすための手段がな

かったのです。何の解決策もなく、 十字架以外に頼れるものはありま飲 ん。最後の一滴まで苦しみの杯を飲 み干しました。そして、苦しみをも きしかようと決意したとき、甘は あり辛くもある苦しみに酔った味 に、詩編作者のあの喜びの詩を味 さとができたのです。Et calix tuus inebrians quam praeclarus est! (詩編22,5.Vg参照) あなたの杯 は、わたしを酔わせる。わたしは と幸せなことか。」(聖ホセマリ ア、1948年12月15日説教のメモ)

十字架への愛を具体的にどのように 実行しているかを見極めるためにこいくつかの個人的な質問をするでもるでしょう。病気や仕事などのまるではなどのまでの意に反することを、どのように受け止めて予期にでいますが。私たちの人生に現れる予まはなか。私たちの人生に現れる予まはなか。私たちのように現れる事に、どのように現れる事に、どのように表ができる。それを超自然的な 観点から見ようとしていますか。最初は理解できないばかりか反抗的るいでにあらゆるでにあられていますの中に神のみ旨を見て、されたの善のために神が許道』でもまだと考え直しますか。『道』ないるでは私たちのもあるでくこれから、私も喜んでくこれから、私も喜んでくこれからいます」(聖ホセマリア、『道』なら、という一節を繰り返し、ようのに何とふさわしい時期でしょう。

これは、身体的精神的な苦痛に無感覚になることではなく、決して欠ける事のない神の助けを受けて、偶然に見える出来事のさらに上に視線を向けることです。悪いのは、障害から逃れようとすることであり、その障害が真理への忠実さによるものなら、なおさらの事です。

ベネディクト十六世は、パウロ年開始にあたって、聖パウロの使命に関してお話しになりました。「異邦人

愛によって生きます。聖体は、世に あってキリストと共に、キリストの ために苦しむ勇気と力を私たちに与 えます。私たちは知っているからで す。まさにこのように苦しむことに よって、私たちの人生は偉大なもの となり、成熟したものになり、よこ とのものとなるのだということを。

聖パウロのすべての手紙を読むと分 かるように、召し出しのときにアナ ニアに告げられた預言は、パウロの 異邦人の教師としての歩みの中で実 現しました。『わたしの名のために どんなに苦しまなくてはならないか を、わたしは彼に示そう』。パウロ の苦しみは、パウロを真理の教師と して信頼に値する者としました。パ ウロは、自分の利益も、栄光も、個 人としての満足も求めませんでし た。ただ、私たちを愛し、私たち皆 のために自分をささげてくださった 方のために献身したのです。」(べ

ネディクト十六世、2008年6月28日 パウロ年開始式の説教)

今月は、聖母の誕生日、マリアのみ 名、十字架の下のその御苦しみ、そ してメルセスの聖母など、聖母の記 念日が多い月です。これらの祝日 は、聖母により頼み、イエスを聖母により ストにもっとよく従うことを聖母か ようにとの招きであるして ら学ぶようにとの招きであるして との致することができます。

サルベを祈るとき、「尊き御子イエスを、我らに示し給え」と唱えまして不まないでは、イエスを母としてを母いてもとのもとってもとってもとのます。一つは、本のご降誕です。半飼子を選びています。一つは、本のご降誕です。半飼子を表した。もう一つは、来る15

日に記念するゴルゴタの聖なる場面です。

聖母は十字架のもとにじっと佇ま れ、御子を見つめるようにと私たち を招かれます。十字架上のキリスト を眺めると、教皇様があるお説教で お話しになったように、あらためて 「神は剣ではなく、十字架によって 世を贖ってくださったこと | に思い をいたすよう促されます。「息を引 き取る際に、イエスは両腕を広げら れました。それは何よりも受難の姿 です。私たちに命を与えようと、私 たちのために釘付けられたのです。 しかし同時に、両腕を広げることは 祈る姿、司祭が両腕を広げて祈る姿 でもあります。イエスは、ご受難、 その苦しみと死を祈りに、さらには 神と人間への愛の行為に変えられま した。それゆえ、十字架像のキリス トの両腕は抱擁のしるしでもありま す。私たちをご自分のもとに招き、 愛を込めて両腕で抱きしめようとお

望みなのです。これが生きた神のお姿であり、神ご自身なのです。ですから私たちはその御腕に自己を委ねることができるのです。」(ベネディクト十六世、2007年9月8日 Mariazell巡礼地での説教)

聖ホセマリアがどれほど度々、永遠 の司祭キリストが腕を広げておられ るのは、私たち皆を、一人ひとり を、迎え入れるためだと、動作を交 えて話しておられたことでしょう。 キリストの十字架に与るとは、理解 することが難しいことだとしても、 神から特別に愛されているしるしで あることを次のように説明しまし た。「十字架は引きずるものではあ りません。肩にかついで運ぶもの **――**。そうすればあなたの十字架は ただの十字架ではなく、聖なる十字 架となるでしょう。仕方なく担った りしないで欲しい。あきらめは狭い 心の表れです。十字架を愛するので す。心から十字架を愛するなら、あ

なたの十字架は――、十字架のない十字架となるに違いありません。そうすれば、イエスと同じようにあなたも、道行きの途中で必ず、マリアに出会うことでしょう。」(聖ホセマリア、『聖なるロザリオ』苦しみの第四神秘)

教皇様が、ルルドの聖母ご出現150 周年にあたって、9月12日から15日 までフランスを訪問されます。霊的 にそのご旅行に同伴し、身体的精神 的に苦しんでいるすべての人を、主 が癒してくださるように、一心に願 う機会にしましょう。Salus infirmorum病人の快復、Consolatrix afflictorum憂き人の慰め、であられ る聖母の取次ぎにより頼み、その人 たちが自己の苦しみを、十字架上の キリストに一致してささげるなら、 教会の善のため人々の救霊のために 非常に役立つことを理解できるよう に願いましょう。

9月15日といえば、自然と愛するドン・アルバロに思い至ります。オプス・デイという聖なる重荷を穏やかに落ち着いて担われた方です。どうか、あなたと私が同じ寛大さで応えることができますように。

心からの愛を込めて祝福を送ります。

皆さんのパドレ

## †ハビエル

## ゾーリンゲン、2008年9月1日

pdf | から自動的に生成されるドキュメント https://opusdei.org/ja-jp/article/shuren-qu-chang-noshujian-2008nian-9yue/ (2025/12/02)